



MINATO

みなとユネスコ 会報

Bulletin

MINATO UNESCO ASSOCIATION NEWS & CALENDAR

ISSUED BY/MINATO UNESCO ASSN. 16-3,SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004/HIROSHI NAGANO PRES.
発行所/港ユネスコ協会 〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 Tel: 03-3434-2300 Fax: 03-3434-2233 発行人/ 田部葵一郎
Mail:m-info@minatounesco.jp https://minato-unesco.jp

2026年3月1日発行 第182号

目次

P. 1 巻頭言	P. 14-15 日本語スピーチコンテスト
P. 2-7 ユネスコ精神と国際対立	P. 16-17 湾岸を海から眺望
P. 8 みなと区民まつり/フェスティバルーン	P. 18 クリスマスカードと紙オーナメント作り
P. 9 いけばな	P. 19 新年会
P. 10-11 インドネシア学生/日ユ全国大会	P. 20 事務局便り
P. 11-13 おいしい魚の教養	

平和への祈り

港ユネスコ協会 副会長 今村孝子



平和を求め続けて80年、日本は戦後すぐに国際的な役割を持つ国際連盟が市民の中から、もうこのような戦争はこりごり、武器を持つことなく毎日を過ごすことを誓いあいました。広島、長崎の原爆は既に落とされ数多くの人々が亡くなり、あらゆる戦争というものを経験することになりました。文化的、経済的、政治的に最低のレベルから働き続け、辛い人々の喪失感は長く残りました。

深い文化の歴史は、戦争によって全く失われる事はなく、社会教育に反映される事もなく、やがて研究で力を取り戻した経済は上向き始め、昭和37年頃よりトランジスタラジオ、テレビ、冷蔵庫を持つことが人々の夢となりました。平和を得るにはそのようなものに囲まれていることが大事になってきました。きれいに光った器具は羨望の元となり、平和を手に入れた感覚は大きな喜びでありました。また経済は人々の特別な努力によって上向き、足りなかった日本の経済の勉強には、イギリス、アメリカの特別な奨学金が与えられ、新しい技術にシステムが進歩し、科学・経済は世界的に成長しました

けれども、世界ではベトナム、朝鮮戦争などアメリカの力を頼みにした戦争が世界のあちこちで勃発し、アメリカの力を借り、戦争も激しくなりました。一方、日本は文化も華やかにファッションが花盛り、美しいもの生活に必要なものは世界中で負けないものを作り出し、貿易戦争とともに、文化、戦争の華やかな時代の到来。平和だから発展して、人々のオーラは飛行機時代、文化の交流は世界の美しいものを求め、文化を高めてきました。

必要生活レベルを上げ、精神的にお金で平和は得られないことを証明するように、人々の生活様式も、ヒッピーや歌の世界は世界中に広がるようになり、皆が歌を楽しむような世界に向けて発展し、そこから文化交流、人的交流も広がり、新しい音楽の世界が見えてきました。世の中、平和が良いことを証明する時代であったと思います。そうこうするうちに、5000人10,000人もの人々が歌を一緒に歌うと言う思いがけない交流の広がりも見ます。なんと素敵な時代になったと思っても、

(P.7へ続く)

2025年度 第1回国際理解講演会
「ユネスコ精神は国際対立を乗り越えられるか」

日時：2025年7月12日 14時
会場：港区立男女平等参画センター
リーブラ学習室C

講演：小林亮氏 玉川大学教育学部 教授
ワークショップ：江原朋花氏 青山学院大学ユネスコクラブ (Le Lien ルリアン)
ワークショップ：齋藤楓氏 青山学院大学ユネスコクラブ (Le Lien ルリアン)

今回は、玉川大学教育学部小林教授から、「ユネスコ」について、全般的に解説をしていただくことになりました。同教授は、長い間、玉川大学教育学部教授として玉川大学ユネスコクラブの顧問もされ、また、パリのユネスコ本部へ学生さんたちと一緒にスタディーツアーを企画されるなど、ご活躍されていらっしゃいます。第二部では、青山学院大学ユネスコクラブ (Le Lien ルリアン) の江原朋花さん、齋藤楓 (かえで) さんによる、関連ワークショップが行われました。以下、ご講演の要約です。

【第一部】小林亮氏

1. 平和に向けたユネスコの変容的教育

■ユネスコが展開している教育は、昔は価値教育 values education。最近は変容的教育 transformative education で、物の見方、生き方、考える、価値観をより平和で、持続可能なものに変容していくことに、力点が置かれています。



■対立と分断の世界

～今日の基本テーマ～ 第三次世界大戦になりそうな現状がある。このような時こそ、ユネスコが進めている地球市民性の育成とか、葛藤解決の能力の強化が教育課題となります。これがユネスコ活動の課題。

■矛盾した状況

国際対立の尖鋭化、排他的ナショナリズムの台頭、他方で、グローバル化の進捗、国際的連帯の協調も重要である。すなわち、

- ・ ICT、AI 技術の進捗で、情報が世界中で瞬時に共有される時代になり、世界が結びついており、
- ・ 気候変動、海洋汚染、エネルギー問題、食糧問題、水問題をはじめ、世界全体が一つのコミュニティとして、連携して、対応しなければならない課題も増加しているため。

■ユネスコ憲章の言葉（1）

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」パリのユネスコ本部の中庭にある石碑に、このユネスコ憲章の前文が刻まれています。ユネスコの公用語6カ国語をはじめとする諸言語で記載されていますが、日本語がないのが残念です。（英語、フランス語、ロシア語、スペイン語、中国語、アラビア語）

■ユネスコ憲章の言葉（2）

「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人の間に疑惑と不信を起した共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにも戦争となった」。「お互いを知ることが平和の礎」が、ユネスコ活動の基本になります。なので、異文化間学習、地球市民教育の重要性が、平和構築の基礎となる。

■ユネスコの主要事業

- ・教育、科学（自然科学・人文社会科学）、文化、コミュニケーション。
- ・その時、人類社会が直面している課題を解決して行こうとしているビジョン。

■ユネスコの変容的教育

ユネスコは戦後80年に渡り、その時代の人類社会が直面する重要課題を改善、解決するための指針となるさまざまな変容的教育（Values Education、Transformative Pedagogy）を提唱してきました。代表的な「変容的教育」は、ユネスコの考えている教育課題である。

■2023年ユネスコ新教育勧告（1974年ユネスコ教育勧告の改訂版）

- ・ユネスコ第42回総会で採択された。2023.11.20。
- ・新しいユネスコ教育勧告は、教育のあらゆる側面をまとめ（ESD 持続可能な開発のための教育、GCED 地球市民教育）、デジタル技術AI、気候変更、ジェンダー問題、基本的自由まで、さまざまなテーマ分野を結びつけている。その都度人類社会が直面してきた課題を解決しようとしている。
- ・国際理解教育学会は、より理解してもらうために、カード型教材を開発しており、さまざまなネットワークも活用している。

■ユネスコ教育勧告2023

<ユネスコのネットワークの役割を重視しているが特徴>

・71条 加盟国は、特に持続可能な開発のための教育（ESD）と、地球市民教育（GCED）の相互関連性について、ユネスコチェア、UNITWIN ネットワーク（先進国と途上国の大学が一緒になって課題を解決していく）、ユネスコスクール（ASPnet）などのユネスコの関連プログラムやネットワークの支援を受けながら、政府間の取り組みを通じて互いに協力し、また国内外を問わずあらゆる関係者と協力することで、本勧告に関する自国の活動を拡大し、完遂するよう努めている。

2. ESD と SDG s

■ESD（Education for Sustainable Development）について

- ・大きな柱は、「持続可能な社会を実現するための価値観や行動の変容」。このままだと持続可能ではないので、100年後、1000年後まで、生き延びていけるよう、行動、価値観を変えて行きましょうという教育。文部科学省は、ユネスコスクールをESDの推進拠点としている。
- ・「ESD for 2030」という枠組みも、2015年国連総会で採択されている。若者を支援していくこと。教育者の能力形成。学習環境の変容など。

■SDGs 持続可能な開発目標

2015年国連総会で採択された人類共通の目標で、2030年までに達成すべき17の大きな目標ですが、実際には、2030年迄に達成できない模様です。2030年には、次の開発目標が国連によって採択され、それがユネスコ活動の指標になると思われている。

■ESD と SDGs はグローバル人材育成のカギ

英語力より、国際感覚の方が重要である。世界の諸問題に関心が持てるか？世界の諸問題を解決・改善に向けて変えてゆこうとしているか？世界の諸問題の解決に向けて、創造的な発想が持てるか？など。

■競争型ではなく共生型の社会

- ・グローバル化の進捗に伴い、21世紀型スキル、国際バカロレア、グローバルコンピテンシーといったグローバル人材育成のプログラムが開発されている。
- ・しかし、これら競争型人材育成とあわせて、競争の負の側面をカバーするための、「共生型」のグローバル人材育成が求められる。これが、ユネスコが提唱している変容的教育である。国連やユネスコが目指しているのは、競争型社会ではなく、共生型の社会。「誰一人取り残さない社会 No one will be left behind」

3. 価値の衝突

■価値の葛藤

- ・現代社会では、多様性が重視されるが、国籍、民族、宗教、政治的立場、職業、世代、ジェンダーなどによって異なる価値観や道徳判断があり、異なる価値観の間で衝突や葛藤が起きることが多くなっています。「共生」は、簡単ではない。
- ・何が「正しく」、何が「誤り」なのかの判断が難しくなっているのが現代社会の特徴です。
- ・こうした価値の葛藤に直面して、どのように解決をしたらよいのかを考えることは、現代社会に生きる私達にもとめられる「生きる力」である。

■文明の衝突

文明の衝突論（ハンチントン）～21世紀には政治的イデオロギーではなく、民族、宗教が作り上げてきた文明間の対立が激化して、それに振り回されるだろうと予測したが、その通りになっている。

- ・米中の対立
- ・アメリカとイスラム圏の対立
- ・ロシアと NATO 諸国との対立

■イスラム教における女性の地位

- ・イスラムにおける女性の地位は、「コーラン」とその注釈「ハディース」での記述が根拠となる。イスラム教の女性観は、アラブ人の部族社会の家父長制を強く反映しています。
＝「女性は保護すべきもの」
聖典「コーラン」には、第4章「婦人」の章がある。
「アッラーはもともと男と女の間には、優劣をおつけになったのだし・・・」
- ・タリバン（イスラム原理主義）では、自分達は、神の言葉であるコーランの教えを忠実に守っているので、外からいろいろ言われる筋合いはない、という言い分。欧米からの批判は、彼らから見ると的外れ。これも文明の対立の一局面。
- ・コーランの記述をどの程度、現代に適用するか？

■ 仮説→参加者の皆様への問い

- ・ 文明の対立は、根本的に解決されないのでは？ 真の「普遍的市民性」概念を構築していくためには、イスラム文明、中国文明、ヒンドゥー文明等の「非西洋文明」が、文化伝統の中で何千年も培ってきた「市民性」に「市民権」を与え、（前近代的と決めつけるのではなく）諸文明にある普遍的要素を統合していく形で新たな市民像を創っていくのが、ユネスコ的で、前向きなアプローチではないか？ 皆様、いかがお考えでしょうか？
- ・ 世界の人口では、21世紀後半には、イスラム教徒が世界一、キリスト教徒より多くなる。するとイスラム教徒の正義が世界を代弁するのか？ この問いを投げかけたい。

4. 地球市民教育（GCED: Global Citizenship Education）とは何か？

■ 地球市民とは？

- ・ ユネスコが最優先課題として取り組んでいる教育プログラムの一つである。ベートーベン交響曲第九番 Alle Menschen werden Brüder 「すべての人は兄弟姉妹となる」のイメージ。
- 「ESD」と「地球市民教育／グローバル・シティズンシップ教育 GCED: Global Citizenship Education」は、ユネスコが現在、最優先課題として取り組んでいる教育プログラム。

■ 「グローバル教育第一イニシアティブ Global Education First Initiative」

～2012年 潘基文 国連事務総長によって提唱されました。

- ・ 3つの最重点課題とは、①全員就学 ②学習の質改善 ③地球市民意義の醸成。これに基づいて、ユネスコは、2013年に「GCED 地球市民教育」を発足させた。

■ 「地球市民教育」(GCED) の目的

- ・ 人類社全体が直面しているグローバルな課題について、ローカルな視点、およびグローバルな視点の両方からよりよい解決の方策を考え、当事者として、世界が直面する課題に積極的な貢献ができる人を育成する教育を目的とする。

5. 正義の対立を乗り越える視座

■ 今、世界でおきていることは、「正義の対立」である。お互いに自分達は道義的に正しいことをしているのに、相手が道徳的に間違った態度をとっていると主張している。ロシアとウクライナの戦争をみても、イスラエルとパレスチナの対立、米中対立4、アメリカとイランの対立も。正義の対立を乗り越える何らかの視点と手段が獲得されないといけない。

■ 問題提起

- ・ 世界人権宣言は、第3回国連総会で採択された。1948年12月10日。（12月10日は、世界人権デー）賛成48票、反対0票、棄権8票で採択された。棄権国：ソビエト連邦、ウクライナ、ベラルーシ、ユーゴスラビア、ポーランド、南アフリカ、チェコスロバキア、サウジアラビア。棄権8か国は、国連の提唱した人権宣言を普遍的価値とは考えなかったということ。 問い：文化的多様性が尊重されなければならないというが、文化的多様性とは、どこまで含むのか？民主主義の捉え方、人権の捉え方、平和や戦争の捉え方の多様性は認められないのか？ 例えば、北朝鮮の正式名称は、朝鮮民主主義人民共和国。ホームページには、民主主義を国是とする人民主体の国家として運営していると書かれているが、彼らの民主主義をやっているのは、間違った民主主義なのか？

■ 共生を妨げる要因

- ・ 憎しみと不信感

- ・共生を否定した例：ユネスコ危機遺産
- ・バーミヤン仏教遺跡の破壊が意味すること

6. ユネスコスクールと民間ユネスコ運動

■1953年創設 世界的な学校間ネットワーク (ASPnet)

日本：1083校 (2025.9月)

世界：12,000校 (182カ国) (2025.3月)

・港区のユネスコスクール

聖心女子学院 初等科・中等科・高等科
東京都立三田高等学校

・ユネスコスクールに重点的に取り組んでもらいたいとユネスコが推奨している学習テーマ

- ① ESD (Education for Sustainable Development 持続可能な開発のための教育)
- ② GCED (Global Citizenship Education & Culture of Peace and Non-violence 地球市民教育および平和と非暴力の文化)
- ③ 異文化学習 (International Learning)

・戦争当時国や独裁国家もユネスコ加盟国

ロシア・ウクライナ・パレスチナ自治政府、北朝鮮、アフガニスタン、
ミャンマー、スーダン 他

ロシアのユネスコスクール 280校

ウクライナのユネスコスクール 79校

これらの国々のユネスコ協会やユネスコスクールと繋がり、平和への道を開拓できる
のではないかと？ 回答は、政治的レベルを超えたところから見つかるのかも知れない。

・民間ユネスコ運動の世界的ネットワーク

日本：268団体 (2025年6月現在)

世界：4921団体 (89カ国)

【第二部】江原朋花氏、齋藤楓氏

「ユネスコ精神で“優越”を超える多文化理解」のワークショップが行われました。

参加者を4つのグループに分け、それぞれが選んだ料理、スポーツ、衣装、音楽のテーマ



の中から国別の立場に立って、他の国より優れている点などの意見を述べ、異文化共生を感じるものです。ファシリテーターは、都立三田高校ユネスコ委員会の生徒さんたちが中心になって行われました。



ご登壇いただきました皆様、お忙しいところ、ご協力いただきまして、大変有難うございました。戦争の絶えない時代に、ユネスコについての解説・ワークショップを企画いただきましたことは、大変意義のあることを感じております。参加者31名。

(常任理事 国際学術文化委員会 佐藤律子)

(P.1から続く)平和への祈り

えられないことはおこります。プーチンによって始められたウクライナの戦争は、どこまでも欲望をあからさまにしながら広がり止められなくなり、どちらが悪いのかわからなくなり、あちらを立てればこちらがあったから立たず、そして喧嘩両成敗の両方の責任は両方の国が責任をとることができずに、いまだに他の国々の力に頼らざるを得ない状況になっています。

立派な人たちの喧嘩であっても、とてつもない考えや世界レベルの常識と言うのがわからなくなりました。戦争と言うものに平和がおびやかされつつあり。普通の生活の中に爆弾が飛び込んできて、何百人のいのちをも一度きに奪い取るということを何度も見せられて考えさせられます。

今本当に平和はどこにあるのでしょうか。まず私たちの心の中で考え、みんなで時間を持つことが必要になってきたと思います。そして平和に向かって走り続けてきた日本の考える平和のこころを、ユネスコから発信していかなければいけないのではないかと考える今日この頃です。教育の場からたち上がったユネスコ活動の働き、またこのたび、増上寺が大切に守ってこられた日本の大切な3本の経典大蔵経がアジアの大切なお経として世界の宝物として認定されたと言う特別な事は、昔の日本から失われなってきた平和を求める姿勢が失われなかったからなのではないでしょうか。

私達は結局、一人一人は小さな力かもしれませんが、それを結集、する努力を重ねながらこつこつとよいものを選び、よいことを実行しながら、自分の弱さも強さも経験しながら、平和を模索しつつ自分の人生を仲間を大切にしつつ、共有することが出来ればそれは小さな一歩であっても、祈りながらいつしか大きな力になり感動になるにちがいないことを感じて生きていきたいと思ひます。

みなと区民まつり

日時：2025年10月11日（土）11:00-17:00、

および12日（日）10:00-16:00

会場：芝公園みんなの広場

11日は、小雨が降ったり止んだりでしたが、予定どおりの開催です。雨にもかかわらず人通りは多く、毎年、港ユネスコ協会のブースをめざして来る方もいて、準備ができる前から対応におわれました。衣類の試着も狭いテント内でしていただくなど、勧め上手なスタッフのおかげで売上を伸ばすことができましたが、降りかかると雨やテントからしみこむ水が気になり、お客様対応と品物の保護で忙しい一日でした。

12日は晴天。大通りでは鼓笛隊のパレードがあり、2か所のステージ会場では、前日に引き続き、日頃の練習を披露するパフォーマンスが行われ、食品コーナーも賑やかでした。清家区長と実行委員会の方々が、各ブースを巡回され、励ましの言葉をいただきました。

今年は協会の活動紹介に力を入れ、各委員会作成のパネルを掲示、これからの催しのチラシ、人会案内を配布しました。



フェスティバルーン

日時：2025年10月18日（金）11:00～20:00

会場：ばる一ん館内およびグラウンド



日頃〈ばる一ん〉を利用している団体の、館内展示、グラウンドでのステージ公演があり、物産販売、体験教室、地元商店の出店など参加団体約50、来場者は21,912人になりました。清家区長はステージで挨拶された後、時間をかけて会場を見てまわられました。

港ユネスコ協会は各委員会のパネル掲示を館内で、グラウンドでは、バザーを行いました。毎年、頭に巻く手ぬぐいを買に来る焼き鳥屋のおじさんが「来年は来られないんだ。店をやめるから」と5本買って行かれました。「別れのハンカチ」ならぬ「別れの手ぬぐい」

となりました。

皆様から寄せられた不用の品を、必要な方に利用していただき、売上を国際 UNHCR 協会に寄付いたしました。ユネスコの SDGs の主旨の一部に近づけたのではないかと考えています。

バザーに品物を提供された方、準備・運搬、販売にご協力をいただいた会員、事務局の皆様、ありがとうございました。「フェスティバルーン」では、2F 事務室職員の方々の細かなご配慮に感謝申し上げます。

(みなと区民まつり委員会 磯部豊子)

文化体験教室委員会 日本の伝統文化「いけばな」

日時：2025年11月29日（土）13時30分～16時00分
会場：港区立生涯学習センター101号室

いけばなは仏に花を供える風習が伝えられたことから始まり、いけばなの最初の流派である池坊には500年以上の歴史があるとされています。港ユネスコ協会では、今年も池坊中央研修学院の中村正和氏を講師にお迎えして3回目となるいけばな体験教室を開催し、6名の外国人を含む18名の参加者がいけばなを体験しました。

実施内容：

- ・いけばなの歴史や理念の解説
- ・講師によるデモンストレーション
- ・いけばな（自由花）体験



いけばなの起源は活版印刷の発明や東ローマ帝国の滅亡の時期まで遡ります。講師の中村先生からいけばなについて、池坊では草木のありのままの姿を見つめ自然を敬う気持ちを大切にしており、形ばかりではなく草木の面立ちを見つめることが大切というお話がありました。咲いている花だけではなく、虫食い葉や枯葉も命が巡ることを想起させる所に美しさを感じ大切にするという池坊の考えは新鮮でした。花材や道具の説明や、自然の草木の姿を想像して構成を考えるなどのポイントを説明して頂き、中村先生のいけばなのデモンストレーションを見学しました。最後に、参加者も同じ花材を使っていけばなに取り組み、草木や花の特徴や全体のバランスを考えながら思い思いに作品を仕上げていました。

熱心な参加者の皆さん、そして参加者全員の作品一つ一つに丁寧にご指導・ご助言くださった中村先生に深く感謝申し上げます。



(常任理事 横井 彩)

インドネシアからの高校生への日本語レッスン

10月末の29日と30日の2日間、インドネシアから来日した高校生9名に向けて、日本の文化習慣と日本語を紹介する機会をいただきました。きっかけは、10月に入ってから突然届いた一通のメールでした。「数名の生徒を連れて東京を訪れるので、その際に日本の文化や言葉を1～2回のレッスンで教えていただけないか」という依頼でした。

日本語教師として、このようなリクエストにはできる限り応えたい——そう考え、委員長、各委員の皆様、そして会長にご相談したところ、いずれも大変前向きなお返事をいただき、今回の開催が実現しました。

来日した高校生たちは、将来の進学に向けて日本の大学を見学するために来日したとのことでした。レッスンは1日1.5時間ずつ、わずか2回だけでしたが、日本の生活、学校制度、日常のマナーなどを写真スライドとともに紹介しました。また、日本語については、滞在中に役立つような基本フレーズを中心に学んでもらいました。

印象的だったのは、インドネシアには日本の文化が広く浸透していることです。たとえば、ドラえもん「どら焼き」を準備して試食してもらおうとしたところ、「インドネシアにもどら焼きがあります!」と教えてくれました。そして、全員が、学校で少し日本語を学んでいるとのことでした。

ティーンエイジャーらしく、ヒジャブを身につけながらも活発で、興味を持ったことはどんどん質問してくれます。最終日のレッスンでは、折り紙の手裏剣を紹介し、皆で楽しそうに作りました。

準備期間が短く、あれもこれも紹介したいと思って彼ら用のテキストを作るなど、かなりの時間を費やしましたが、二日間のレッスンはあっという間に終わってしまいました。

今回の経験をきっかけに、短期来日する若い方たちへのクラスが今後定期的で開催できればと願っています。

そして、今、世界各地で起こっている戦争は、ほんの一部の貪欲なリーダーたちによって引き起こされているものです。だからこそ、私たち一人ひとりが心の中に平和の砦を築くことが大切だと感じます。

今回出会った彼らが、将来再び日本を訪れ、日本とインドネシアをつなぐ架け橋となる日が来ることを、心から期待しています。
(P. 11 ～続く)



第81回日本ユネスコ運動 全国大会 in 金沢
テーマ：「日常」 能登半島の創造的復興を目指して

日時：2025年10月18日（土）
会場：石川県立音楽堂邦楽ホール



2025年度の全国大会が、石川県金沢市で開催され、参加いたしました。参加者300名（都ユ連から15名）。オープニングは、小・中学生によるジャズバンドの演奏で始まり、パネルディスカッションを中心に行われました。

パネルディスカッションのテーマ：「日常」能登半島の創造的復興をめざして奥能登6市町の代表者が、「日常」をただ取り戻すだけではなく、より創造的な復興を目指すための活発な意見交換が行われました。主催者から、今回のパネリストは、30歳～50歳くら

いの方で、大学進学や就職などで石川県外の生活を経験した方に登壇いただいたとのお話がありました。

懇親会は、最初のアトラクションでは、高校の吹奏学部や大学のダンス部の演奏とパフォーマンスが行われました。今回の全国大会は、ユネスコの要素が少ないのでは？という方もおられるものの、主催者からは、演奏を通じ、音楽の力で地域に希望と勇気を届けたいと企画しました。各ユネスコ協会に帰られましたら、是非それを報告していただきたいと話されていました。

■2026年全国大会は、福岡県久留米市で開催の予定です。
（常任理事 佐藤律子）

（P. 10 から続く）インドネシアからの高校生への日本語レッスン



（常任理事 田川純子）

2025 年度第 3 回国際理解講演会
「日本人なら知っておきたい～おいしい魚の教養」
ながさき一生氏 おさかなコーディネーター/東京海洋大学講師

日時：2025 年 11 月 29 日(土) 18：30～20：30

会場：港区男女平等参画センター リーブラ学習室 C

1. 【自己紹介】

新潟県糸魚川市筒石の漁師の家に生まれ育つ→東京海洋大学→築地市場勤務→東京海洋大学博士課程修了→大手通信会社勤務&さかなの会立ち上げ→おいしい魚の専門家として独立
現在、セミナー講師、執筆、イベント主催、PR、ICT 化支援、魚アドバイザー
最近の著書：「魚ビジネス」

2. 【日本・東京都・港区と魚】

・日本にとって魚は重要なたんぱく源

日本では 7000 年以上前から魚を食べていたと思われる。縄文時代の貝塚などから様々な魚の骨が発掘されている。FAO（国連食糧農業機関）の資料によると、2018 年時点で日本の一人当たりの魚介類の年間消費量は 45kg で世界平均の 20.5kg の倍以上となっている。魚は地域での舞や祭りなど他の文化にも派生している。



- ・魚の消費量が多い都道府県の 1 位は富山県富山市（ブリ全国 1 位）少ないのは沖縄県那覇市（鯉節や缶詰は全国 1 位）、マグロの消費量 1 位は静岡市（焼津港がある）、2 位は甲府市（海はないのに静岡の港から運ぶルートが古くからあり）
- ・魚種ごとにも傾向が違い、青魚で見ると購入量については、アジは西日本が多く（1 位は長崎市）サンマは東日本が多い（1 位は札幌市）。魚種によって多く消費されている地域は異なる。
- ・東京は全国でも 5 番目の魚に支出金額の多い都道府県。また東京は全国・世界から様々な魚介が集まってくるのが特徴で、豊洲で扱う品目は 500 品目にもなり、世界一取扱金額の大きな魚市場である。また、東京都は漁業でも大島や東京湾、それから内陸の河川で多くの魚種の生産量がある。
- ・東京では海外から来た外国人に寿司下駄を出すと、全国のいろいろなところで取れた魚の種類が一度に食べられることのすごさを感じられる。
- ・港区のお魚の歴史は古く、江戸時代の海岸沿いは「芝濱（しばはま）」と呼ばれる砂浜で現在の本芝公園付近には「雑魚場（ごこば）」と呼ばれる小魚を扱う魚市場があった。本芝浦と金杉浦は江戸城に魚を納める義務のある「御菜八ヶ浦（おさいはっかうら）」に含まれており江戸の食文化を支えていた。関東大震災後芝浦に仮設市場が開設されたが後に築地に移転し、現在の豊洲市場につながるルーツの一つが港区にあったと言える。

現在でも港漁業協同組合や芝漁業協同組合が存在しており江戸前の海産物を提供し続けている。また、東京海洋大学（港区港南）と連携した食文化の講義や親子への食育イベントなど魚食への関心を高める取り組みが行われている。

3. 【食卓に届けられる魚の変化とその原因】

・獲れる魚が変わってきている。

北海道でブリが揚がる→海流の変化、黒潮の蛇行が終わったか。

能登半島地震による海の地殻変動で魚種の変化が起こっている。

瀬戸内海の栄養分が減ってイカナゴやタコが獲れない→上水道をきれいにする為、チッソやリンが少なくなったためと言われていた。ごく最近、イカナゴについては、温暖化の影響でエサとなるプランクトンが少なくなり、夏場にもエサを求めるようになったところ、天敵（サワラなど）に捕食されることが主な原因と分かった。

東京で冬の海水温が 3 度上がって下がらない→タチウオやクロダイが盛んに獲れるようになった。

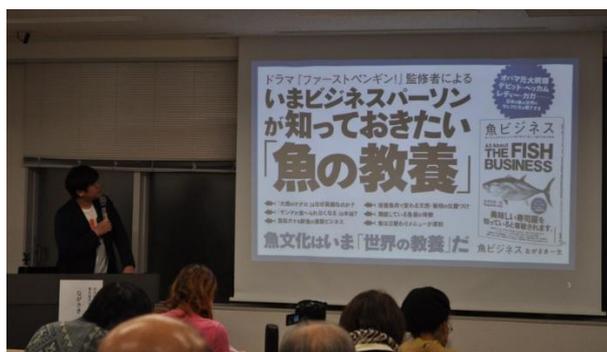
- ・ 海水温・海流の変化や海の酸性化（CO2による）、周期変動、海の地殻変動などが原因、沿岸環境の変化や漁獲により人為的な影響も。原因は温暖化だけではない。

<最近ニュースで聞く話>

- ・ マグロの資源量が増加して豊漁になり、以前よりお手頃に食べられる。漁場で狙っていない定置網に入ってくる。漁獲量の制限で漁獲枠がない場合は、どの道死滅する可能性が高いにも関わらずリリースしなければならないなど資源保護の関係でよい事ばかりではない。
- ・ 頭足類のスルメイカの漁獲量が10年前の7分の1に減少。今年は豊漁だが漁獲枠の関係で一時漁獲できず資源管理方法の見直しも必要か。ちなみにスルメイカは寿命が1年で産卵が終わると死んでおしまいになる。
- ・ ウナギはワシントン条約により取引規制対象とするか会議に掛けられたが否決された。ちなみにヨーロッパやアメリカではウナギはあまり食べない。

4. 【変わる これからの魚の常識】

- ・ 昔、魚を買っていた場所は街の魚屋。現在はスーパーの魚売り場。
- ・ マス流通のスーパーでは、魚は同じ規格のものを大量に求めるが、漁業側は規格化できないし網を上げるまでは何が入るか分からない。規格化できない魚は現代の流通と相性が悪い。従って現代的な流通には冷凍・養殖が求められる。
- ・ 技術革新の影響では保存・冷凍の技術の進歩で安定的においしく食べられるが旬を楽しむ概念が薄れる。養殖技術の進歩は味をニーズに合わせられるが、味の多様化が低迷する。新たな生産技術の進歩で、細胞培養による魚肉生産が可能になり、より効率的な生産が可能になるが、魚食文化の多様性の低迷が懸念される。
- ・ ブリと言えば北陸→北海道でもブリ
天然がおいしい→養殖もおいしい
生がおいしい→冷凍もおいしい
缶詰や干物は保存食→缶詰や干物もご馳走～一昔前の『魚の常識』は変化しています。



5. 【おいしい魚を食べ続けるために】

- ・ いろいろな魚を食べることで資源分散を考える。
 - ・ 求める魚を応援することが食べ続けることにつながる。
 - ・ すべて自分で知ろうとせず魚に詳しい人と仲良くなることで魚の情報のアップデートにつながる。
- ～魚で日本を元気に



(国際学術文化委員会 梅根敬一郎)

第9回 日本語スピーチコンテスト

日時:2026年1月11日(日) 13:00~16:00

会場:港区男女平等参画センター「リーブラ」ホール

2026年1月11日、リーブラホールにて「日本語スピーチコンテスト」を開催いたしました。当日は、港区長の清家愛様、ならびに港区教育委員会教育長の新宮弘章様にもご出席いただき、地域全体でイベントを盛り上げる大変貴重な機会となりました。

今年度は参加資格を「国籍不問」としたことで、日本に帰化された方を含め、例年以上に多くのご応募をいただきました。選考の結果、9カ国・9名の出場者が、それぞれの熱い思いを披露してくださいました。

第二部では、出場者と来場者による交流会を実施いたしました。この交流会では、都立三田高校および青山学院大学ユネスコクラブの学生の皆様、及び以前関わってくださった方々にファシリテーターを務めていただき、参加者同士が自然な形で親睦を深められる場を創出してくださいました。多くの来場者を迎え、会場は大変な熱気に包まれました。

また今回は、審査員を務めていただいております港区商店街連合会会長の臼井浩之様と、港区教育委員会様のご協力のもと、「港区PAYプレミアム商品券(交通費相当分)」を参加者へ進呈することができました。

本コンテストも、会員の皆様やスピーチコンテスト委員の皆様を支えられ、成功裡に終了いたしましたことを心より感謝申し上げます。来年は記念すべき10周年を迎えます。これまでの歩みを振り返るとともに、次の一步に向けた今後の方向性を見出していきたいと考えております。

審査結果

最優秀賞	Ngan Thien Trinh	ガン ティエン チン
港ユネスコ協会会長賞	Wahitta Kurnia	ワヒッタ クルニア
港区長賞	Gurung Anish	グルン アニス
港区教育長賞	Zhao Shuo	趙碩 チョウ セキ
港区商店街連合会会長賞	Sophie Syzdykova	スイズディコワ ソフィー
審査員賞	Lkhagvadorj Oyungegee	ラハグワドルジ オユンゲゲー
優秀賞	天海 浪漫	あまみ ろまん
優秀賞	Haluk Oguz	ハルック・オウズ
優秀賞	Kaung Myat Htet	カウン ミヤツ テ
会場特別賞	Kaung Myat Htet	カウン ミヤツ テ



学生ボランティアの皆さん



出場者と来場者の交流会



最優秀賞を受けるベトナム出身のガンさん

(常任理事 田川純子)



出場者・関係者の記念写真

(P. 17 から続く) ～ 運河の生きものと私たちのつながり ～

港区の海を川と森から探索したり、湾岸を巡ったりしての「東京の森・川・海を知る」シリーズ 8 回目を無事に終えることができました。フィールドワークという内容の為、話し手様の声が、皆さまに届きにくかったことお詫び申し上げます。



(副会長 小林敬幸)

東京の森川海を知る シリーズ No.8
「湾岸を海から眺望 & 生き物観察」
～ 運河の生きものと私たちのつながり ～

日 時：2026年1月31日（土）9：30～14：00

会 場：日の出棧橋、港区の運河、古川の河口

講 師：佐々木 剛 先生（東京海洋大学海洋政策文化学科教授・水産学博士）

大寒の季節の中、好天に恵まれ東京海洋大学の生徒さん含む27名さまにご参加いただきました。

1) 日の出棧橋を出航、生き物観察のためプランクトン採集、採水・・・歴史と環境を確認

東京湾に面して運輸や排水、給水のために人工的に作られた水路「運河」の自然環境を調べました。川の水、海の水の交じり合う場所「気水」での「水質、表層、低層の水、水温、塩分、COD（水の濁り具合）」を測るため「採水」。船を進めながら歴史を確認。電機会社「東芝」の拠点の地、芝浦一丁目「重箱堀」辺りは療養場所、海水浴場（心と体を癒す）の歴史のある地、明治21年に水産伝習所（東京海洋大学）が設立された地など芝浦の近世の歴史を学び、又ここは武蔵野台地の西側に位置して青梅、羽村（標高・250m）から水が流れてくる最終点。新宿、麻布の所々に湧き水も含んで東京湾の水の流れ、大地を削る歴史も説明いただきました。

港区の清家区長さんは「港区は東洋のベネチア、水の都を目指す」のお考え。これに佐々木先生は大賛同され、もうひとつの水の都、中国の蘇州「楓橋夜泊（ふうきょうやはく）」（張継作）の詩吟の一節を吟じてくださいました。お気持ちは芝浦に「水の都を作ろう！！」でした。



2) 近年の環境対策と残る課題。 「カニ護岸」を確認。

ここには一万匹のカニが生息、カルガモも住むようになった。ここでは「鉄の団子（植物プランクトン（珪藻）に鉄イオンを供給して増殖を促進）」を10年投入し続け、不純物（硫化水素など）を鉄が吸収してくれることで海の浄化を図っている。船を進めるうちにオレンジ色の「オイルフェンス」が見えてきました。生活排水23区内の10区分を「水再生センター（芝浦）」で浄化しているが、大雨で処理しきれない分をここから排水すること、量が多すぎるのが課題。そして「東京の生下水が出る場所60カ所ある。これも解決しながら海の環境を整えていきたい」と解説頂きました。

3) 生き物と水質の観察。

採集した生き物「プランクトン」を肉眼でも見る事ができました。表層水温 10.0 度、低層水温 10.0 度（通常は表層より少し温かい）。表層塩分 1.5、低層は通常 3.5。上が真水、下に塩水の状況を「塩水楔（くさび）」という。河川水よりも密度の高い海水が淡水の下にもぐり状に上流へ入り込む状況を言う。「この流れを生物は巧みに利用して鉛直移動、横移動、回転移動して河口域に留まって生息。プランクトンも集まり、食物連鎖が起き、人も住み、街ができる・・・」と解説いただきました。

4) 「芝浦はどんな所？」 船中で「芝浦」で思うことを話し合いました。「埋め立てられた運河、心地よい風、屋形船、東京の漁業の拠点、すしの発祥、漁師さん、」などイメージが出されました。



5) 下船後は、日の出棧橋の広場で「これからの芝浦について」グループワーク、そして発表。

「排水での汚染のことを再認識した」「水辺のふれあい環境が大事。洗剤、油の処理に注意していきたい」、「生物多様の実態が分かった。野生、水質、排水、下水、個人の努力によって将来は魚が増えていくようにしたい」「生き物のつながりが分かった」「水上航路を増やしたい」「水質改善キープ」「船着き場を増やす、釣りができるようにしておいしく食べられる魚を増やしたい」「水の環境を自分のこととして考えるきっかけになった」「もっと水辺のことを知るべき」など話し合いました。

6) 午後は鈴木晴美さん（古川の河口の金杉橋を湊として漁業を営まれておられる）のお話

「東京湾でアナゴ、あさり、クルマエビ、スズキが獲れる。海苔（浅草海苔）を養殖した時代もあった。これからもおいしい海の幸を提供していきたい」「羽田沖では小型の定置網、スズキ、太刀魚、イナダ、マコガレイも獲れる」「多くの小学生とも一緒に東京の海を学んでいる。その時にも輸入時に紛れ込んだ外来種、ゴミ、ビニール袋ペットボトル、ビニール袋の話題も多くでる。子供たちが真剣に環境を考えている」「セメントで護岸工事もあって浅瀬が少なくなり（産卵環境には浅瀬が必要）・酸欠状態になるとプランクトンが死んでしまう・・・砂を他から運んで人工浅瀬を作ったりしている」「海をきれいに使おうという気持ちが大切ですね」

7) まとめ 毎年9月には芝浦の「水神様」のお祭りがある。豊漁と航行安全を守ってくれる神様ですが、海を整えるのは我々住んでいる人たちの問題であるとも感じた一日でした。

佐々木先生より「東京の海に興味関心を持っていただけの一日になりました。『皆さまの生活が海とつながっている』という思いを感じていただけたと思います。これからも海とつながって行きたいです。」と結ばれました。

(P. 15 へ続く)

オカモトヤ協力「X'mas Magical Workshop」

12月6日、虎ノ門で100年以上の歴史を誇る老舗文具店であり、ライブオフィス「Palett Plaza」を実現しているオカモトヤのご協力のもと、「X'mas Magical Workshop」を開催いたしました。

当日は、未就学児1名と小学生2名を含む合計12名の皆さまにご参加いただきました。親子連れに加え、大人だけの参加も多く、幅広い年代の方々にお楽しみいただけるワークショップとなりました。

今回の内容は、立体的なクリスマスカード作りと、ツリーを彩るオーナメント作りの2種類のクラフトです。お子さんたちはお母様やお父様と一緒に作業し、相談しながら作品を完成させていく姿がとても微笑ましく、会場全体が終始温かい空気に包まれました。

また、大人の参加者の皆さまからは、

「思った以上に難しく、夢中になってしまいました」

「季節を感じながらものづくりができて心が和んだ」

「今後もこのようなワークショップをしてほしい。」

など、嬉しい感想を多数いただきました。

完成したカードやオーナメントを手にした参加者の表情はどれも満足げで、それぞれの思いが込められた作品が輝いて見えました。

今後も、このように季節感を大切にしたワークショップを継続して開催し、子どもから大人まで、誰もが創作を楽しみながらリフレッシュできる場を提供していきたいと考えています。



(常任理事 田川純子)

2026年 新年会

今年も例年にならい新年会が1月21日18時より NEC 三田倶楽部で開催されました。田部会長 永野前会長 坪谷副会長 中島事務局長を含む総勢21名の内、20代の新入会員も2名参加され華やかな雰囲気でした。

田部会長から今年度の港ユネスコ協会活動報告の開会の辞を頂きました。開会のお食事の座席もくじ引きでランダムにさせて頂き、美味しい洋・中華のお料理と共に楽しい談笑で会話が弾みお部屋全体が明るいムードでした。



食後ビンゴゲームが古市さん進行のもと、田川さんがいつもの笑いを誘う、名司会で其々数字が発表される度にざわめき、そしてリーチ、ビンゴと楽しい時間が過ぎました。一番最初のビンゴは、当協会の賛助会員として2年前からご協力頂いている方でした。長年の賛助の御礼の気持ちになりました。賞品授与の前に司会者からの質問メモが用意され、「もし、1億円が手に入ったらどうされますか?」「皆様にふるまいます」の名回答!さすがでした。次々に幸運なビンゴ当選者が名乗り、会場が笑い声で更に盛り上がりました。

坪谷副会長の「楽しかった!」の明るい声で閉会となりました。港ユネスコ協会も年々会員減少傾向ですが、今後も皆様の親睦を深める楽しい企画を催して行きたい。



(常任理事 奥村和子)

事務局便り

【ようこそ新入会員】

前号以降、10名の新入会員が加わっていただきました。

【開催中の事業】

☆日本語講座 (Winter Term) 田川純子先生 開講中 (土曜日 10:00～) 10回

☆英会話講座 Robert Edward Shiffer 先生 冬期 開講中 (木曜日 18:30～20:00) 9回

※上記語学教室の開催場所：港区立生涯学習センター3階 港ユネスコ協会事務局内

☆茶道入門講座 小野宗恵先生 後期 開催中 (第四月曜日 14:00～16:30)

港区立生涯学習センター2階 203号室

【今後の事業予定】

詳細が決まり次第、当協会の website (<https://minato-unesco.jp>) に随時掲載されますので是非ご覧のうえご参加ください。

以下に、フランス・パリのユネスコ本部から発信された最新の広報文 (抜粋) を紹介いたします。

UNESCO mobilizes an additional \$6.9 million from Japan to support emergencies

17 February 2026



As the world faces unprecedented crises, from conflicts to climate change, UNESCO has today announced 19 new projects worth \$6.9 million to support emergencies around the world, thanks to Japan's contribution. The new funds will strengthen actions in the areas of cultural heritage, education and access to information and will reinforce UNESCO's role in emergency settings.

At a time when global development assistance is under severe strain, Japan continues to stand out as one of UNESCO's most trusted and steadfast partners in crisis response. Its support in the most complex emergencies underscores the essential role of education, culture and information on the frontlines of peoples' needs, and it also serves as a powerful reminder of how vital international cooperation is to global stability.

港ユネスコ協会事務局 火曜日～金曜日 (祝日を除く) 午前10時30分～午後5時

〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 TEL: 03 (3434) 2300 TEL・FAX: 03 (3434) 2233

Eメール: m-info@minatounesco.jp ウェブサイト: <https://minato-unesco.jp>

